

聞名仏教

第 152 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 5 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

罪とは何か

佐々木蓮磨

では法律上の罪を犯したこともなく、また道徳的な悪を行ったこともないとい

近年、青少年の非行と凶悪犯罪の増加ということが、一つの大きな社会問題となっております。そのため道徳教育の振興が叫ばれたり、「人づくり」ということが国策の一つに数えられるようになってきました。

世間で罪と言っているものの多くは法律上の罪をさしてきます。例えば裁判で有罪と決まれば罪人と見、無罪と決まれば、その場で青天白日の立派な人間となるようなものです。

そこで社会の安寧をはかるために法律を厳にすることも止むを得ないでしょうが、ややもすると法律の条文にとらわれ過ぎて精神面がお留守になり、人間が薄情になるという弊害をまぬがれません。また、その反対に外形は法律に触れた行動であっても、精神的には尊い人間愛の発露である場合もあります。先年別府で交通事故による瀕死の重傷者を病院に運ぶためスピードを出し過ぎて、スピード違反に問われた運転手がありました。これなどは人命を尊重したという点では尊い道徳的行為であります。法規に違反したという点では明らかに法律上の罪人です。

人間には、罪は全くないということができるでしょうか、これは問題です。こうした人には、いつしか自尊心が伴い他を批判する傾向があるものです。世間で立派な道徳家と言われるような人には、概して人間的な親しみが薄いものです。それは外面を装う心と、自尊心があるからでしょう。人間は如何に努力しても、内心の我慢や我見を捨てることはできません。この我慢(慢心)や我見が働くかぎり、いかに立派なことを言っても、また行っても利己主義が伴いますから、厳格な意味では精神的な罪を犯しているわけです。この罪は外面には現われ難いですが、人間であるかぎり内心において犯しておらぬ人は一人もないと言つてよいでしょう。この罪ばかりは宗教によらねば救われませんから、これを宗教的な罪

んがみ道徳の問題に関心が深まつてきたということは、まことに喜ぶべき現象ではあります。その方法如何? ということになる、どうもハッキリした線が出されていないようです。そうなると、口では「道義の高揚」とか「人づくり」とか、やかましく叫びながらも、その衝に当たるものは全く暗中模索と言った状態となつて、結局は「労して効なし」と言う結果に終わるのは当然でしょう。

人間は、つねに罪という

しかし、世間にはいわゆる「法の網をくぐる」と言つて、巧みに法律に触れぬような方法で人に迷惑をかけたなり、社会に害毒を流すようなものも少なくありません。こうした人間は法律上では無罪ですが、道徳上では悪質な罪人というべきでしょう。現代は人間の知恵がすぐれてきたため、う

まは悪質な罪人というべきでしょう。現代は人間の知恵がすぐれてきたため、う

まは悪質な罪人というべきでしょう。現代は人間の知恵がすぐれてきたため、う

と申します。

このように罪の正体を吟味して行きますと、一切の人間は自分に気づくか、気づかぬかの相違があるだけで、罪の生活からのがれることはできないのであります。ここにおいて人間の優越感と劣等感、責める人と責められる人、敵と味方とがおのずからに解消して、万人が平等に手をつなぎ合う同朋の世界がひらけ、はからずも平和の光が招来するのではないでしょうか。

道徳教育も「人づくり」も、人間の本性を突き止めぬかぎり美辞の羅列、理論の空転に終わることは明らかです。古聖が叫んだ「汝自身を知れ」の言葉は、時代の如何を問わず人間教育の指針であらねばなりません。(了)

〈遠方法話予定〉

*五月二十八日。大谷派福井別院（福井市花月一丁目二―三六）。法話と座談
午前十時始と午後一時半始

現代真宗問答 17

B 「亡くなった両親は死んでどうなったのでしょうか。また私は死んだらどうなるのでしょうか」

A 「世界にはいろいろな考えがあります。私たちは仏教徒であり、真宗門徒ですから、真宗の教えに従って考えたいと思います。まず死んだらいつかは仏になります」

B 「なぜですか。また（いつかは）というのは」

A 「仏に成るのは、死んで次に生まれ変わった時（来世）であるか、次の次の生（来世）であるか、さらにその先の生であるかは、分かりませんが、仏説無量寿経に（十方衆生 もし浄土に生まれずば我は仏に成らない）と誓われた法蔵菩薩様はすでにアミダ仏に成って活動しておられますので、一切衆生をいつかは浄土に生まれて必ず仏にしたいだけと聞かせていただいています」

B 「では仏に成るとは」

A 「仏とは自利と利他を完成したお方です。自利とは真理を悟って本当の安らぎに達したことであり、利他とは他の迷い苦しんでいる者たちを救うはたらきをいいます。自利の内容は真理を悟った智慧であり、利他の内容は慈悲です。それで仏とは智慧と慈悲が無量であるお方のことです」

B 「では仏に成るにはどうしたらいいのですか」

A 「仏に成るには仏に成る因（たね）がなければなりません。その因を真宗では信心といいますが、アミダ仏の救いを信じる信心が仏になる因です。この仏因によって、次の世（来世）で仏果を得る、いわゆる仏に成ると説かれています。なお他宗では、自分の修行によつて仏因を成就するという道も説かれています」

B 「ではこの世で仏因がなければ、どうなるのですか」

A 「仏に成る因がなければ、自分の今まで為してきた善悪の行い（業）の結果によつて、次の世界が決まるといわれています。善悪の行いの結果は様々ですが、様々な世界に生まれるといわれています。それを大きく分けて六つ（六道）ほどにまとめられています。それが天上界、人間界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界などとされ、自らの善悪の行いである行業の結果の善し悪しによつておもむく先が、天上界（神々の世界）から地獄界まで説かれていきます。悪業が重いと地獄に落ちるといわれています」

B 「自分の善悪の行いによつて、次にどういう処に生まれるかが決まると言われるのですね」

A 「ええそのように説かれています。そういうのはたらきを業力不思議といいますが、業の力による結果の不思議です。これを信じるのは難しいでしょうが、どういう形になるのかについて、一つだけはハッキリしています。それは人間界です。私たちは現に人間界です。人間に生まれてきたことは不思議ではありませんか」

B 「あまり考えたことはありませんが」

A 「私は最近、人間の存在は何と不思議であろうかと思えます。人間に生まれる前に、こういうものに生まれたいと思つたとしても、およそ想像ができません。あるいは他の天体から宇宙人が地球に降りてきて人間を見たらびっくりするでしょう。人間存在は不思議のかたまりです。本当は人間だけではありません。猫でも鳥でもバッタでも同じです。こういうのはたらきを業力不思議といわれるのでしょうか。業力の不思議によつて人間以外のものに生まれることもあり得るのではないのでしょうか」

B 「業力とは」

A 「今まで行ってきた善悪の行いの結果による力、業のエネルギーといえます。肉体は死んで焼却して他の物質の形に変わります。こうした物質エネルギーは変化していつてなくなりません。業のエネルギーも死しても無くな

るのではなく、連続していくのだと受け取れましょう。そしてその業の力が次の形(身)を形成するといわれています。私たちが死してまた人間になるか、餓鬼になるかなどは、業エネルギーの内容によって変わると説かれています」

B 「そうすると私たち人間は過去(前世)の業エネルギーの結果によって出た来た姿なのですね。不思議ですね。猫も犬もその結果だといえるのですね」

A 「ええ、猫や鳥や牛などは畜生(界)と説かれています。ただ猫や鳥が実際どういう感覚で生きているかは分かりません。なぜなら鳥や犬の姿を私たちはどこまでも人間の感知能力で見ているだけです。鳥自身、猫自身はどういう境界にいるのか分かりません」

B 「では最初の問題に移りません。亡くなった親は現在、仏に成っているのでしょうか」
A 「私には分かりません。ただこれだけはいえます。一切衆生をかならず仏にしてみせるとはたらきづめにはたらいてくださり、常に寄り添って

救いのはたらきをされていて、衆生に喚びかけてくださるアミダ仏がともにましますということ、これだけは疑えませんが。なぜなら私のような、仏に成るような因は一つも無い者にもアミダ仏はつねに共にいてくださり、ナムアミダブツと喚びかけてアミダ仏のなかに置かれていることを知らせてくださっていますから」
B 「そうすると、私の親はずでにアミダ仏に救われて仏になっっているかもしれないし、あるいは未だ迷いの世界にいるかもしれない」
A 「ええ、そういえませぬ」
B 「もし私の親が未だ迷いの世界で苦しみを受けているとすると、それが心配です」
A 「あなたが心配する前にアミダ仏はご両親によりそって、救いの手を差し伸べてくださっておられるのですから、アミダ仏におまかせすることですね。それともう一つ、もしあなたがこの世でお念仏を称え、このアミダ仏のお助けにあうなら、あなたは浄土に生まれて仏になることができるでしょう。仏に成ると、今度は菩薩として迷いの世界に還

り、まずご両親のところに向いてご両親を救うこともできましょう。これは私が勝手に申し上げていることではありません。經典に説かれているのです」
B 「なぜ浄土に私が生まれて仏に成れば、迷える人を救うはたらきができるのですか」
A 「それは先述しましたように、仏とは自利利他いわゆる自らが悟り他の者を救うお徳を完成したお方だからです。『歎異抄』というお聖教にも、

ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いづれの業苦にしずめりとも、神通方便をもつて、まず有縁を度すべきなりと云々。
(歎異抄第五章)

と説かれています」
B 「それともう一つ、アミダ仏に助けられるのは何であり、何が浄土に生まれるのでしょうか」
A 「いい質問ですね、これは実は難しい問題で簡単には言えません。助けられて浄土に生まれるものである(私)というものはもともと実体的な

存在ではないというのが仏教の見方なのです。けれどもアミダ仏の救いの対象である(私)がなければ、話になりません。まず身近に感じていただきたいのですが、その答えの一つとして、今、このような問いを出しているあなたご自身が(何ものか)でありましょう。その私がアミダ仏の救いの対象なのです」

B 「ええ確かに、質問している私が今ここにいますね」

A 「ええ、そう話したり考えたりしているあなたそのもの、それがアミダ仏の救いの対象です。ただ仏教ではそういう私が今ここにいても、それは実体的な固定的な存在ではないのです」

B 「一番身近でありながら、この私そのものが実体的なものではないのですね」

A 「ええ、そうです。それを仏教語でいえば(名色)といえます。(名)とは知るはたらき、いわば意識であり心です。そして(色)とは物質いわば身体ですから、名色とは意識的かつ物質的身体的な存在ということであり、これは様々な他のものと重々無尽に関わ

りつつ、常に移り変わってやまない流動体です」

B 「難しいですね」

A 「ええ。自己は単なる意識(心)だけの存在ではなく肉体的な存在です。私の存在は、心的なものと身体的なものとの統合体であり、しかもそれ以外のまわりの環境と密接につながっています。そして一瞬一瞬移り変わりつつある当体が(私)なのです。そういう私のことを親鸞聖人の『教行証文類』には、行巻に(業識)——(信心の業識)——といわれ、また化身土巻には(識体)——(仏経に言わく、——という言葉が出てきます。要するに業識体が当面の私です。アミダ仏の救いの対象です。なお悟りを開いた勝れた仏教学者であった玉城康四郎博士は業識体のことを業熟体といわれています。この言葉もいい言葉です。博士の本はいくつも出てますので読んでください」

B 「この業識体の私が南無阿彌陀仏に救われて、浄土に生まれて仏に成るのですね」
A 「ええそうです」

B 「この業識体が浄土に生まれることができるのはどうしてですか」

A 「それは先述しましたように、仏になる因をいただくことによつて仏に成るのです。阿弥陀仏の本願を信じる信心が仏因ですから宗祖は仏に助けられて浄土に生まれる者のことを（信心の業識）と仰せられています。仏因である信心を頂いた業識（私）です」

B 「業識という世間でいう靈魂のようなものですか」

A 「いいえ違います。靈魂というイメージは靈魂という実体的なかたまりを想像してしまいましたが、業識体は他の様々な縁（環境）と離しがたく一つでありながら、身心的な存在として、つねに流動しつつある連続体といわれています。世界とともに流れて行っているのです」

B 「業識体のことですが、私は身体的、肉体的な一つの個物ですね。また同時に意識的精神的な存在なのですね」

A 「ええ、業識体の（識）とこの人の存在の意識的精神的な面であり、（体）は肉体的

的な物質的側面ですね。意識面と物質面が別々なものではなく一体的であり身心的な存在ということですね。それがいわゆる識体です」

B 「私たちは肉体を持つ存在ですが、同時に意識（心）的な存在であるのはよくわかります」

A 「心的な存在であるということとは非常に大きな意味をもっています」

B 「心の働きのことですね」

A 「ええ、心の本質は（知る）という働きです。実は知る働きは（知られるもの）と分かち難く一つであるということ

です。知るはたらきだけあつて、知られるものはないというものは成り立ちません。知られるものない（知る）はありえません。見るということ

は見られる色とか形が同時にあります。聴くというの聴かれる音や声が同時にあります。冷暖を感知するというこ

とは感知される環境（気温とか雪とか熱風とか）が同時にあります。要するに知るはた

らきには知られるものが同時にあり、知られるものは環境としてあります。知るはたら

きに離れず、知るはたらきにおいて目の前の机や樹木や山や川、他の人々など、いわば世界がその人にとつて（存在する）ということですね」

B 「私という存在は身心的な存在であることは知っていますが、それが私の環境と離れがたく一つであることには思い及びませんでした」

A 「身心的な存在は同時に外の世界と密接につながっている

ので、身心的存在だけが単独で動いているのではなく、世界とともに流動しているの

です。仏教では私たちは流動の存在であると言われますが、世界と共に流動しています。そういうように全体的に流動しているのです」

B 「全体的に流動しているというの

A 「例えば私は今人間としての存在ですね。人間という存在は人間の意識で外を感じているのです。決して猫や鳥の心で感じているのではありません。人間の意識に感知している世界をもっているのです。

いわば世界や環境を知る能力、感知する能力に応じて世界を見たり聞いたりしているの

です。猫に小判、ということわざがあります、同じ小判を見ても猫が見ている小判と人間が見ている小判は内容が違いますね。鯉節を見ても猫と人間では違います。私たちが

世界と見ているもの、いわば環境として見たり聞いたりしている世界（他者）は、人間の意識（それぞれの感性や

価値観など）によつてさまざまに受け取られているのです。そういう世界と共に一瞬一瞬

生きつつあり、流動しつつある存在が業識体としての（私）なのです」

B 「一人ひとりに一人ひとりの世界があるのですね。では、業識の業とは」

A 「これは、そのような私の善悪の行いのことです。私たちはそのつど善悪などの行為を重ねてきました、その行いを業（カルマ）といいます。

そういう私の行いの善し悪しが私の身心的存在の形を形成する要素として識体のなかに蓄積され、その結果が未来に

どういふ身心的存在と世界を感ずるものとなるかの因となるといわれています」

B 「要するにこういうことですか。悪業を重ねると死して地獄の世界に落ちるとか、善い行いとすると神々とか人間の世界に生まれるとか、いわれ

れますね」

A 「ええそうですね。人間は行為的存在であり、善悪を行う存在であつて、為した行いはその結果（報い）が現れる、

いわば自業自得といわれています。例えばなぜ私は今人間という存在なのかというと、

人間に生まれる前に人間に生まれるような善悪の行いをしてきたからだといふ説か

れてきたのです。そういう行為（業）的存在であるということがいつて（業）という言葉

がついているのです」

B 「少しづつ分かってきました」